



ポケットから

橋爪大三郎さんの (社会学者)

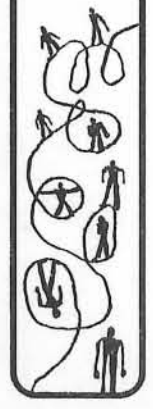
吉田茂といえば、昔の政治家。有名なわりに、なじみが薄いのではないかと。『吉田茂という逆説』を読めば、そんな感じはふつ飛んでしまう。戦前は軍部に反対。戦後は『再生日本』『新生ではない!』のためにマッカーサーと渡り合い、戦後復興、講和や日米安保条約を実現した。「白足袋の頑固な老人」という俗なイメージの裏に、戦後日本の骨格をつくり上げた、時代の演出者としてのあざやかな人物像がよみがえってくる。

と運搬す(る)ことを理念の核とする。入。終戦間際には和平工作を試み、憲兵隊に逮捕されている。こうした経歴からマッカーサーの信任を受けて、長期政権を維持することになった。九〇年代の新史料もふまえ、保阪氏は大久保利通の子・牧野内大臣を長父にもち、松岡洋右、岸信介、佐藤栄作とも関係が深い吉田茂。外務省を辞めてからも、きりぎりまで戦争回避をはかった。ヨハンセン(吉田反戦)・グループとしてマークされ、私邸にはスパイが潜

入。終戦間際には和平工作を試み、憲兵隊に逮捕されている。こうした経歴からマッカーサーの信任を受けて、長期政権を維持することになった。九〇年代の新史料もふまえ、保阪氏は大久保利通の子・牧野内大臣を長父にもち、松岡洋右、岸信介、佐藤栄作とも関係が深い吉田茂。外務省を辞めてからも、きりぎりまで戦争回避をはかった。ヨハンセン(吉田反戦)・グループとしてマークされ、私邸にはスパイが潜

再現してみせる。なるほど、吉田ならそうでなければと納得できる。単なる実証ではない、創造的な作業である。吉田茂の『逆説』とは、『皇国日本の再建』を願う天皇主義、宮廷官僚が、戦後民主主義の序章役をつとめたというねじれ構造のこと。その呪縛はいまも続く。軍隊でないと吉田が強弁した警察予備隊(自衛隊)と、憲法の関係。再軍備を拒んだかわりに基地を提供したことのツケ。池田勇人、佐藤栄作ら宮原を政界に抜擢した人事(吉田学校)と、自民党支配。この呪縛に立ち向かわなければ、吉田ドクトリンにかわる二世紀の斜路はみつからない。

カジユアル読書



吉田一彦「著」騙し合いの戦争史(P)HP新書・700円

岡崎久彦「著」日本外交の情報戦略(P)HP新書・700円

J・G・ロバーツ、G・テイビス「著」軍隊なき占領 (森山尚美訳、講談社+α文庫・800円)

ぼくらが抱える大きな宿題

暗号解読や謀略の教々。情報戦は、戦争のゆくえを左右する。イラク戦争は、フセイン大統領の身柄を狙ったピンポイント攻撃で始まった。イラク政権内部からの有力情報にもとづき、戦後日本の占領政策をモデルにすべきだという話まで出た。だが、ヒトラーの独裁国家だったイラクと、天皇の名で終戦し象徴としての地位を保った日本とは、まるで事情が違う。なお、戦後の日本でアメリカが繰り広げた工作については、『軍隊なき占領』が掘り下けている。スパイ・ソルゲに手玉にとられ、暗号を解読され、情報戦でもきんさんだった日本。情報と聞くのアレルギーを起す向きもある。情報リテラシーを身につけよう。戦後日本に持ち越した宿題だ。

カジユアル読書



ポケットから

橋爪大三郎さんの (社会学者)

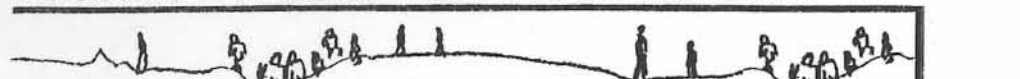
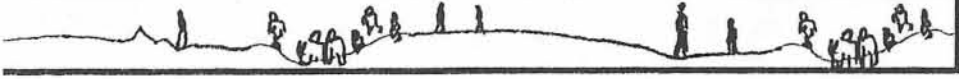
人間はなぜ、戦争をするのだろうか? それは、新しい現実をつくり出すためである。敗れた側はしるし、勝者の主張を受け入れる。現実がひと通りに確定する。だから、現実を組み立てている言葉や情報は、武器弾薬よりも、戦争にとって大事な道具なのだ。

『騙し合いの戦争史』には、二〇世紀の戦争の、情報戦のエピソードがぎっしり詰まっている。敵の意図や装備、戦略について、正確な情報を手に入れる。敵に対して、大事な情報を隠したり、偽りの情報をまき散らしたりする。スパイや

くという。偵察衛星や盗聴で、イラク軍の動きはアメリカに筒抜けだった。古典的な諜報戦の、電子版である。それはかりではない。戦場にメディアが入り込み、現場の映像を世界に生中継

も間に合わない。平時から準備しておく必要がある。外交や安全保障など、政府の基本政策と不可分のものなのだ。この点不思議なのは、アメリカという国家の政略、戦略について研究するアメ

リカ研究が、日本では手薄なこと。最大の同盟国だからと、安心していいのかもれない。でも、それならおのこのこと研究しなくてはだめ。『日本外交の情報戦』で岡崎久彦氏が主張するよすがに、『国家情報官』をおくのも一案だろう。イラクの戦後処理がもたついている。戦後日本の占領政策をモデルにすべきだという話まで出た。だが、ヒトラーの独裁国家だったイラクと、天皇の名で終戦し象徴としての地位を保った日本とは、まるで事情が違う。なお、戦後の日本でアメリカが繰り広げた工作については、『軍隊なき占領』が掘り下けている。スパイ・ソルゲに手玉にとられ、暗号を解読され、情報戦でもきんさんだった日本。情報と聞くのアレルギーを起す向きもある。情報リテラシーを身につけよう。戦後日本に持ち越した宿題だ。



橋爪大三郎さんの
(社会学者)

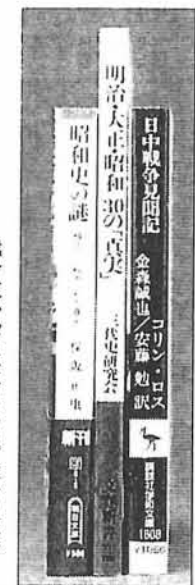
ポケットから



漢字は、日本人の生活に与え込んでい
る。現にこの文章も、漢字だらけだ。
しかし白川静氏にかかると、この漢字
が、底なしの暗闇に発露する。見慣れた
部首も、古代の呪術の小道具や、残酷な
刑罰をかたどったものだとわかる。
たとえば、方の字は「日形にわたした
木に人を殺して集めた形」。放は、その
「死地を脱して邪霊を放つ儀礼」、放は
「長髪を老人を聖する」場合……。
字形の研究は長いあいだ、後漢の『説
文解字』を越えられなかった。近代にな
ってようやく、甲竹文や金文の発露や研

橋爪大三郎さんの
(社会学者)

ポケットから



戦争を忘れてはならない。戦争の悲惨
を記憶にとめよう——
八月がめぐると、誰もが呪文のよう
に繰り返す。それで十分だろうか。
戦地から生還し、空襲を逃げのびた体
験は、忘れようにも忘れられまい。だが
毎年、誰もが少しずつ年寄り、亡くなっ
ていく。気がつけば、戦争についてのこ
く当たり前のことから、知らない世代
ばかりになっている。
『もともとは驚くべき発展が、満州の工
業面で見られた。……ここには新しい
国、……無限の可能性を秘めた国があ

カジユアル読書



白川静「著」漢字の世界 1(平凡社ライブラリー・120円)
白川静「著」漢字の世界 2(平凡社ライブラリー・120円)
秋山駿「著」信長発見(朝日文庫・100円)
究が進み、漢字が生まれる前後のデータ
が集まった。白川氏はそれも踏まえて、
通説の間違いを指摘し、大胆に自説を展
開していく。
本書の特徴は、第一に、人類学者の、
原始宗教の研究を下敷きしている点。
第二に、万葉集の例などをふんだんに盛
り込んで、古代中国と日本の共通性を強
調している点。つまり漢字を、人類に普
遍的な文明のあり方だと位置づけている

底なしの暗闇を相手の大仕事

その漢字も、意味のある形をもち、構成
が透けてみえる。その字形を共有するこ
とで、異民族の統合が進み、合理的な漢
民族が生まれた。
いっぽう漢字を移入し、仮名を併用し
たのが日本。古来の土着文化と中国文明
のつきはき文化が生まれた。もはや漢字
抜きに、日本人はものを考えられない。
しかし漢字の意味は、日本人にとって不
透明なまま。漢字を、古代の呪術的な文
脈で受け入れてしまったためだ。
だから、日本語と日本人の思考をもっ
と合理的なものに鍛えるには、漢字の起
源を解明する作業が不可欠なのである。
英語が世界標準になり、世界に発する言
葉がないと、日本人がたじろいでいるい
ま、白川静氏の仕事はじつに大きな意味
をもっている。
『信長発見』は、秋山駿氏が傑作『信
長』(新潮文庫、一九九九年)に続き、
石原慎太郎ほか三氏との対談をまとめた
もの。グローバル化にさらされる日本人
に、合理的な思考と決断はどこまで可能
か。課題とするところは同じである。

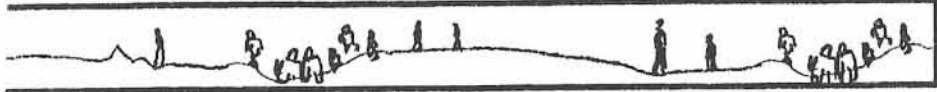
カジユアル読書



コリン・ロス「著」日中戦争見聞記
(金森誠也、安藤勉訳、講談社学術文庫・100円)
三代史研究会「著」明治・大正・昭和30の「真実」
(文春新書・100円)
保阪正康「著」昭和史の謎(檄文に秘められた真実)
(朝日文庫・100円)
「日中戦争見聞記」は、『歴史を叙
述するにあたって史実を曲げることには許
されないとこの考え』の、匿名の研究者
五名による、近現代史への「へえ」である。
保阪正康『昭和史の謎』は、日本人が
たかという感覚を、セピア色の写真のよ
うにわれわれにのみがえらせてくれる。
『近衛文麿は軍部よりも日中戦争に積
極的だった』『民間人を守って奮闘した
関東軍部隊もいた』……。「明治・大正
折々に残した檄文をもとに、ある時点の
切迫したリアリティを再構成していく。
今からはほとんど理解不能な用語や論理
の裏側に、暗黙の前提や価値を探して、
それを現代の言葉で復元していく。

へえ、知らなかったそうだったか

たつたひとつ「真実」の歴史があること
信じるのは、素朴すぎるかもしれない。
過去のあつた時点でほんとうの歴史が確定
し、あとは指の淵から砂がこぼれ落ちる
ように、それが色褪せていくだけなら、
戦争を忘れない(こと)など不可能だ。
そうではない。歴史は、いまを生きて
われわれが、過去を組み立てる言葉。過
去を生きた人びとが気づかず、思っても
みなかった文脈に出来事を置き直し、語
り直すことである。史実を再構成し、意
味づけるやり方はさまざまだから、歴史
も多様でありうるだろう。
いまが刻々とみ出されるように、過
去も刻々とみ出される。歴史を語る作
業には、終わりが無い。それは、今を生
きる(こと)そのものだ。このことに気がつ
けば、戦争の記憶が風化する(こと)を恐れ
ても仕方ない(こと)がわかるだろう。



橋爪大三郎さんの
(社会学者)

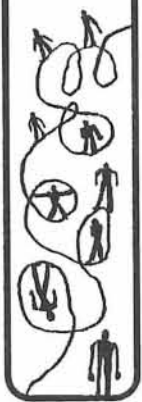
ポケットから

ウイトケンシュタイン。
二〇世紀を代表する哲学者だ。
落日のウイーンに生まれた金髪的美貌の青年は、バートランド・ラッセルのもとに留学する。そして、第一次世界大戦に従軍。何百万人もの兵士たちが虫けらのように意味もなく死んでいった戦場のなかで、常識外れの哲学書(『論理哲学論考』)を完成させた。



まず、この本には、理想も希望のかけらも見当たらない。世界がどんな事実からできているのかの厳密な記述と、それをどう言葉にすればよいかの厳格な規範を、世界が凝縮されている。膨大なノール。《一 世界は成立していることがらの総体である》から《七 語りえぬことがらについては、沈黙せねばならない》まで、整然と番号のふられた命題のなかで、世界が凝縮されている。膨大なノール。

カジュアル読書



大古典の新生に拍手を送りたい
ないと思いつき、せっかくならうと自分の哲学を破壊していく。ふつうの哲学なんてもう役に立たないという確信は、とても正しいと私は思う。

第一次大戦後のニヒリズムは、ナチズムをうみ、マルクス主義も勢力を伸ばした。それも去り、ウイトケンシュタインの思想は今、時代の基軸である。

ウイトケンシュタイン [著] 論理哲学論考 (野矢茂樹訳、岩波文庫・700円)
松岡正剛 [著] 遊学 I・II (中公文庫・各100円)
ジェイムズ・ジョイス [著] ユリシース (丸谷才一・永田玲二・高松雄一訳、集英社文庫・既刊I、II各100円)

トから選り抜かれた、ナイフのような言葉が並ぶ。
二〇世紀の不条理をなおも悩み抜いたウイトケンシュタインは、やがてこの世界は、ここまで厳密で簡潔であるはずがないと紹介されている。

橋爪大三郎さんの
(社会学者)

ポケットから

吉本隆明と、三島由紀夫。まるで正反対の二人だが、共通点がある。あくまで天皇にこだわり続けたところだ。
吉本は一九二四年、三島は翌年生まれの同世代。少し前までは大正デモクラシーの雰囲気が残っていたのに、《僕らの年代になりますと》……もうはじめから神聖天皇の雰囲気の中に入っていた(17頁)。天皇を後に、日本中が奇跡的に運命共同体のようにまとまったと感じた、軍国少年世代なのだ。

戦前、天皇の神格化から冷静な距離をとることができていたが、戦後になるにつれて皇に傾斜。いっぽう吉本は《神聖天皇》の存在をありありと感じながら戦争をくぐり抜け、戦後はその反動からマルクス主義に深く関わる。そして二人とも、戦後の象徴天皇制にいらだちを覚える。アメリカと日本の支配層が仕組んだまやかしにみえたからだ。

カジュアル読書



三島由紀夫はこのまやかしとあえて衝つてい

「神皇正統記(優スヘカラス)」——天皇は責任を追及されない、という意味にすぎない帝國憲法の条文が、神のような存在という意味になってひとり歩きした。《政治的機能など何もなくても……威圧を感じさせる存在……は、権力だと考えらるべきです》(97頁)とのべる吉本は、フランスの哲学者フーコーにも匹敵する。権力の斬新な概念を手にしたのである。



吉本隆明、赤坂憲雄 [著] 天皇制の基層 講談社学術文庫・100円
藤田達生 [著] 謎とき本能寺の変 (講談社現代新書・700円)
パトリシア・スタインホフ [著] 死へのイデオロギー (木村由美子訳、岩波現代文庫・1100円)

「謎とき本能寺の変」は、明智光秀の謀叛を裏で隠る黒幕の存在を推論してみせる。『死へのイデオロギー』は、日本赤軍の起こした数々のテロ事件を、犯人たちの視点から再構成する。どちらにもピンポイントの実証研究だが、もっと大きな文脈のなかに置きなおしてみると、吉本や三島が課題とした天皇とつながりがあると思えてくる。(なお本文中の引用はすべて『天皇制の基層』から)